宍粟郷土研究会会報
NO. 13
37. 5. 1.
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
TEL. 750

山崎闇斎の学問

東大教授　阿部吉雄述

私は先程来、各先生にご紹介にあずかりました阿部でございます。このたび闇斎先生の二百八十年祭が行なわれ、ぜひ行つて何か話したらどうかというおさそいを受け、私としては非常にありがたい気持であります。藤原惺窩先生の跡、山崎闇斎先生の跡、現地に行つていろいろ見られる又、地方の皆様にもお合いしていろいろな話を受けたまわることが出来るということはこんなありがたいことはないと喜んで参つた訳でありますが、たゞ一月半ばかり前に風邪をこじらせまして、ちよつとした肺炎になりまして、もうこられないだろうかと思つていましたが、一昨日始めて龍野で講演をしまして、これなら少しいいと自信を取りもどして来た訳でございます。実は人の前で話が出来るかどうかと思つていた次第であります。こちらに参りまして、昨日惺窩先生のあと赤穂の方向を見学させていただいて、播磨と儒学という題でお話申し上げました。私の主旨は、播磨という国は近世儒学の発生と発展に非常に関係があるという事なのであります。先程来、日高先生や嘉治先生の文明のお話がありまして、それをかえりみて新しい文化をそこから生み出して行くということういう運動がいつの時代にも、あり得なければならんということなのでございますが、この播磨という所は近世の儒学がここで発生したと言つても過言ではない。発祥地であるといつてもよい。ここから新しい文化運動が起るのであります。しかもその文化運動の展開のきつかけを作つた人が山崎闇斎先生でございます。つまり発生と発展と両方のともどもこの土地が関係があるのでございまして、日本の精神界。思想界を確立した本源地であるのでございます。藤原惺窩先生がこの土地に生まれまして、赤松広道という龍野の殿様の絶大な援護を得ましてそして、日本の思想界を革新するきつかけを作つたのであります。いままで学問が宗教に所属していたのを、宗教から独立いたしまして、本当の学問として発展していくきつかけをつくつたのが藤原惺窩先生であります。藤原惺窩先生が始めて家康の前に衣をぬいでだぶだぶの儒服をつけて進講したのであります。その時家康側近の学僧当時の学問記録は全部僧侶によつて行なわれていたのでありますが、関ケ原の戦は、仏教時代から儒教時代に入つた

大きな転換期でありました。藤原惺窩の思想革新運動の自信を与えた人、先生を援助してくれた人が、赤松広道でありました。赤松広道という人は、後に家康からにらまれまして、鳥取で切腹をしたのであります。三十九才でありましたが、しかし、竹田では非常にいい政治を行ないましたといいまして、土地の人が赤松氏の片腕を貰つて来て、土地に葬つたと言うことでありまして、今でもその腕塚があるらしいということが、色々と嘉治先生のお骨折りでわかつて来まして、明日その辺りを探索して見ようと思つているのであります。又先程島田さんから承わりますと碑文もあるらしいと言うことでございます。この赤松広道の持つて居られた本「四書五経」当時朱子学関係の本が二十数冊ございましたのが、内閣文庫に伝わつていまして、それを私が発見して学界に報告したこともございます。そうゆう赤松氏の事も藤原惺窩の事もこの土地に参りまして、色々実地に見ることが出来又、色んな話を聞く事が出来ました事が大変ありがたく思つております。この赤松広道は当時捕虜としてとらわれて居りました、朝鮮の学者姜沆という人を非常に援助いたしまして、この人の事は朝鮮の本にたくさん書きしるしてあります。そのような話を昨日少し致しましたのですが、本日は話を闇斎先生の方に移したいと思います。闇斎先生はつまり藤原惺窩先生、その弟子の林羅山先生、こういう一派の学問を京学派と申しますが、これに対して南学派の人であります。南学と言うのは、土佐に発達した学問でありまして、山崎闇斎先生は、土佐で学問を行ないまして、京都に帰つて来られ更に、江戸に下りまして、大きくこの学問を基礎づけまして、天下の三分の一は山崎闇斎の門弟によつてしめられたと言われております。どういう人を持つておつたかということを段々お話したいと思いますが、先ずこの資料をお手元にお渡ししておきましたので、それによつてこれを考えます。実はこれは私が闇斎先生の像を絵葉書で見まして、これは実に立派な像だ、素晴らしいものだと思いまして、それにちなんでこんな歌があつたと思い出したのであります。〜資料1（してます（垂加）の神とも知らで背のひくき、浪人ものと人や見るらん）（跡部良顕）〜この跡部良顕は闇斎先生の孫弟子に当る人でありますが、この歌は京都の出雲路さんのところにあるのではないかと思いますが、あまり風彩はあがらなかつたようで、背が低かつたのでありますが、しかしながら「眼光ケイケイとして向い近づくべからず」というはげしい人のようであつた。常に八角の棒で畳をたたきながらはげしい調子で講釈をしたようでございます。丁度この像を先程から見ておりますと、右手に何かもつておられた形でございますが、そういう八角棒でももつておられたのではないかとひそかに思つております。それから第二番でございますが山崎闇斎先生と山崎との関係でございま

すが、これは私よく存じません。こちらに来るにつきましてちよつと調べてみたんでございますが、山崎闇斎先生がいつか　山崎家譜というものを作つております。その家譜によりますと、曽祖父の浄栄は播州の人とありまして、おじいさんが播州宍粟郡山崎村に生まれ、木下家定侯に仕えて父浄因は家定侯、つゞいて嗣君利房侯に仕えた。利房侯が位を失つて三年、おそらくこれは大阪の役の後だろうと思いますが、三年間闇斎先生のお父さんはよく利房侯の面倒をみたといい、利房公が復位して、浪人になつたのであります。時に三十二才と書いてあります。これを私年表で繰つてみますと、元和六年になりまして、その時闇斎先生は、三才でありました。闇斎先生が三才の時にお父さんが浪人しております。お父さんが四十四才の時にこれを年表で繰つてみますと、寛永八年になります。闇斎先生十四才の時に再び木下利房侯に仕えております。そうして四十七才闇斎先生十七才の時には、又浪人しております。家譜によりますと、闇斎先生の兄弟は男四人、女二人で闇斎先生は末子であります。皆落陽に生まれると書いてあります。京都に四人共生まれたとこう書いてあります。ですから、先程神社に参りましたが闇斎先生祖考の碑と書いてありますが、これは間違いないことだと思います。で普通闇斎先生のことをつね、私等京都の浪人の子供だとこういう風に紹介しておつた訳であります。けれども正しく言うならばやはりこれは、播州山崎の人と言うべきだと思います。これを間違つて我々は京都の人と申します。それは、資料の五番目の保科正之侯伝記にやはり「嘉右衛門は元播州山崎の人で」と書いてあります。こういう言い方こそ正しいのであります。たまたま京都で医者、はり、のような事をやつておられて大変苦労されておる時に、闇斎先生が生まれておると言う事実でございます。しかし正式にいうならば播州山崎の人というべきであろうと思うのでございます。

資料の三番目にもどりますけれども、木下家定という人は、もともと龍野から出たのであります。のちに、北政所の兄になりまして播州の姫路城の城主になり、のちに足守城の城主になります。（次号へつづく）

（この原稿はさる四月一日下村記念館において講演されたのを筆記したもので、文章についての責任は筆記者山崎町教育委員会肥塚義彦にあることを申し添えておきます。）

山崎闇斎の学統について

高田真治博士日本儒学史による

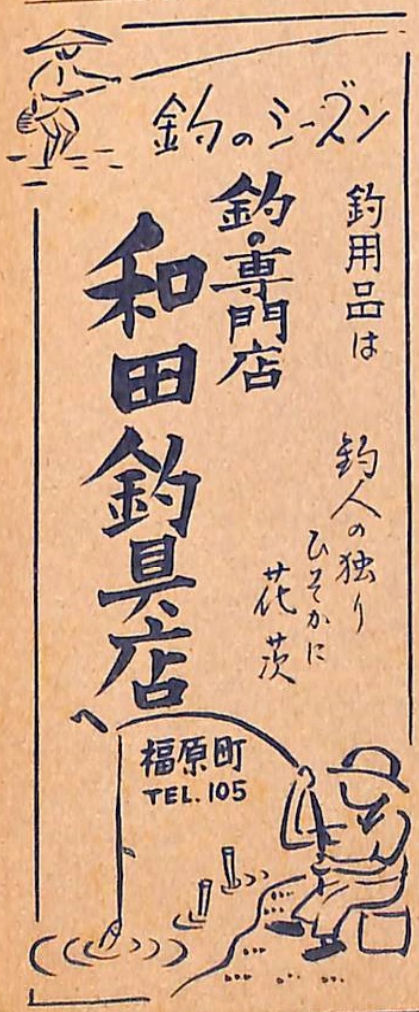
闇斎は幼時大通院の湘南宗化に従つて禅を修め、その後故あつて土佐の吸江寺に送られた。吸江寺は夢窓国師の開基にかかり、その門下に多くの名僧知識を輩出させて居て一に南学（海南朱子学派）の源泉は既に夢窓国師巡錫の時に在るともいわれて居る。勿論その間に伝えられた宋学（朱子学）は、五山学（京都五山僧侶の学）の影響下に在る儒仏一致説で行われていた。南村梅軒が土佐に足跡を印してから、宋学の活動は活潑となり、その門流から谷時中を出すに至つて、儒仏一致から純正朱子学への色彩が濃厚となつた。梅軒門下三傑の一人である忍性は、この吸江寺の僧侶であつて、谷時中の師天質とは切磋の友であつた。梅軒が宋儒の学に従い、修己治人の儒教によるべきことを説きながらも、なお心性の修養に就いては坐禅入定を強調したように、門下の三傑も、亦その軌道より脱し得なかつた。野中兼山が小倉三省の言によつて禅を捨てて儒に入り、専ら朱子学の攻究に没頭するに至つたのは闇斎が土佐に入つた以後のことである。闇斎が吸江寺の後主となつた時は、まだ朱子学が禅学の羈絆から脱しきれず、儒仏混淆の頃であつた。故に闇斎が入佐後二、三年にして提唱したのは、三教一致の思想であり、純正朱子学の鋭鋒を示し始めたのは、その後年のことである。しかし京洛に於て禅学に没頭した闇斎が、後年専ら朱子学に従い、延いては神儒一致論を提げて垂加神道を説いたその思想の転換期は、実にその入佐の時に在つたのである。朱子学研鑽の後蓄髪還俗の歳は二十五、ここに於て藩主の怒りを買い、遂に吸江寺後主の地位を捨てて京都に驥足を延ばすに至つた。闇斎が仏を捨てて儒に入つた由来は、三十才の時に著わした闢異に詳細に述べられてある。かくして三十八才の時始めて講筵を京都に開くや、四方遊学の士が翕然として集つた。闇斎は初めて純正朱子学の研究と体験とに熱中し、或は陸（陽明学派）釈（仏教）を排し、或は京学（御用学派）を駁し、それによつて益々自己の立場を明かにしつつ、旧来の朱子学を純粋化、簡易化、内面化するの要あることを主張し、実践躬行の精神を力説した。更に進んで朱子学と神道との融化合一を計るに至つたことは、それよりやゝ後のことに属する

闇斎の朱子学信奉は、その純正にして他学の混入を許容しない点に特色がある。大家商量集を著して陸王の学（陽明学）を排撃し、闢異を作つて釈老の学（仏教と道教）を斥難した学風は、終生変ることなく、その朱子学固執は、寧ろ甚し過ぎるとの評を受ける程であつた。闇斎の朱子学信奉は、その全面的肯定と実践躬行の生活態度とに於て見られる如く、極めて篤実であつたが、その学説の根基は、理気説と、敬内義外説との二説であつた。闇斎は万有の本

体を理となし、気は理に包容せられ、理気の包容によつて万物を生ずると説くが故に、その所説は、万物生成の過程に於て理気二元論であり、気を以て理に包括せしめる点に於て一元論である。倫理説は全く朱子に従い、性を本然と気質の性とに分ち、前者は理によつて生じ、後者は気によつて現れるものとした。その修為の方法としては、格物窮理と居敬慎独との二法によつて、気質の性に蔽われて生した心の曇りを去つて本然の性を明かにすべしとする復性説を採つたのである。「敬以て内を直くし、義以て外を方にす」とは元来易経の文句であるが、程伊川（中国宋時代の学者）は之をその哲学説の中に取り入れ、「内外を合する道」として深遠な意義を与えている。闇斎も亦之に従つたもので、垂加草の中に伊川の説を敷衍した語は、よくその思想を示すと謂えよう。例えば論語の「君子は己を修むるに敬を以てす」とは敬以て内を直くするものであり、「己を修め人を安んじ以て百姓を安んず」とは、義以て外を方にすることと説くが如き、又中庸の「誠なる者は自ら己を成すのみならず、物を成す所以なり」に就いては、己を成すは仁なり、物を成すは知なり、性の徳なりとし、内外を合する道を説くが如き、而して之を結ぶに「己を成すは内、物を成すは外」の言を以てし、内とは自己に就いていい、外とは物に就いていうと説くが如き、総て是である。即ち闇斎の所説に従えば、自己を修めるは敬であり、外物を治めるのは方なのである。敬、義の範囲をかく判然と定めたことは、その一特色であろう。そして敬とは闇斎にとつては「一心の主宰にして万物の本根」（闢異）であり、極めて重大な意義を持つていたのである。闇斎のこの哲学説は佐藤直方、浅見絅斎以外の門人に賞せられ、友部安崇、稲葉黙斎の如きも、皆この説を継承した。闇斎の純正朱子学が神道と結合して垂加神道の潮流を湧弃せしめたことは、近世儒学史のみならず、更に広い意味に於て一大問題を呈出した。京洛の地より海南の吸江寺に移つた間に於ける闇斎の学風は、当時の風潮を受けて儒仏一致の傾向を帯び、やがて谷時中の薫陶を受け、小倉三省、野中兼山と交るに及んで純正朱子学の信奉となり、それがやがて卜部、吉田両家の神道を受けて、神儒合一の論に展開したのである。しかしその過程に於て終始その学の中心となつたものは朱子学であつた為に、神道を解するに朱子学を以てすることの多いことは、決して怪しむに足りないことである。ただ

朱子学に対して宗教に等しい敬虔の念を払い、その奥を極めた結果は、単に表面的の神儒一致ではなく、その信念に於て深く契合するものがあつた。闇斎は国常立尊又は天御中主神を宋儒の所謂太極と解し奉り、天御とは敬語に当り、中は宙の義、主は主の意、即ち宇宙万有を化育する主宰者と解釈申し上げた。宇宙論はやがて倫理説に転化せしめられる。宇宙論に於て万物生成の根元である太極は、即ち倫理説に於て道徳の本体であつた。闇斎が天御中主神を太極と解釈し奉つたことは、我が国生成の神話に道徳的内容を包含せしめたものとして注目に値いする。勿論このような解釈は、窩、羅山素行等に於ても見得るものであるが、垂加神道という一の思想体系を形成し、その門下より多くの思想家を輩出せしめた所にその相異が存する。闇斎は又諸冊二柱の神は、陰陽の理に順つて人道の起源を為すものとし、天祖は三種の神器を擁して天下を統治し給えるものと考え、ここに宋儒理一分殊（一つの理が分れて万物を生ずる）の哲学を持ち来つて、一神分れて八百万神となり、天地間の神々は唯一神たる天御主神の分身であるが、その根基に於ては同体であるべきことを説いた。かくの如き論は、後世より牽強附会との誹を受け、神道の晦冥（わかりにくいこと）は、儒者の罪の如く論ぜられるのであるが、儒教に日本人としての生命を吹き込んだ信念意気は、決して軽々に一瞥し去ることは出来ない。闇斎は倭鑑を作つて建国の精神を明かにし、国体の無比なことを表章し、正統を尊び、尊王忠孝の大義を顕揚し、名節を褒賞する等従来局地（せまい所）に（びくびくして歩く）した朱子学を日本朱子学としての本義に転換せしめたのである。闇斎が、同じく朱子学に従う林羅山の皇祖泰伯説（我が国の皇祖は中国の泰伯であるとの説）に加えた撃鼓の責難はその我が国古典に示された歴史の絶対的信頼であり、泰伯の後（子孫）とする従属観念打破の強い意志であつた。

闇斎の学は、朱子学派と神道学派とに分れ、朱子学派は更に浅見斎、佐藤直方、三宅尚斎によつて代表される三派に分れた。神道学派には玉木葦斎、正親町公通、板垣信直、梨木祐之の四人が居るが、その学を後世に伝えた者は玉木葦斎であり、その及門松岡仲良の弟子中に竹内式部を出している。又同じく勤王の志士山県大弐もこの学統を受けた一人である。（補注者中谷康郎）



会津侯と闇斎

―三楽問答―

会津侯保科正之の聘に応じて闇斎が正之に赴いたのは寛文五年であつた。主として仕へず侯は賓師の礼を以てした。ある日正之侯闇斎に問う、先生楽しみありや、答へて曰く臣三楽あり、凡そ天地の間生あるもの何ぞ限らん、而して万物の霊長たるは一の楽しみなり、天地の間一治一乱定数なし而して右文の世に生れ書を読み道を学び、古の聖賢と臂を一堂の上に把るを得るは一つの楽しみなり。侯曰く二の楽しみは既に之を聞くことを得たり、請う亦其の一の楽しみを聞かん、答えて曰く所謂楽しみの最も大なるものは幸に卑賤に生れ侯家に生れざること是なり、侯敢て問う何の謂いぞや、答えて曰く意ふに今の諸侯たるや深宮の中に生れ、婦人の手に長じ不学無術声色に徇ひ、遊戯に耽り而して之れが臣たる者、主意を迎合し其為す所は因りて之を称誉し、其為さざる所は因りて之を誹謗し、遂に本然の性をして裕亡消滅せしむ、其卑賤の幼にして辛若を嘗め長して事務を習い、師教へ友輔け以て其智慮を益すものになぞらふれば如何となすや、是れ臣の卑賤に生れ侯家に生れざるを楽しみの最も大なるものとする所以なり、是に於て侯茫然嘆息して誠に先生の言の如しだ、（註）以上が有名の三楽問答である。

正之は闇斎に敬信最も深く、闇斎又感奮奥に誉ふるを思い知りて言はざるなく真に水魚の交りであつた。正之侯も闇斎の学に得る所多かりしと同時に、闇斎の学は又侯の位地と名望とにより言えば蕃山の芳烈侯に於けると同じく、闇斎亦風雲に会せるものといふを得べし、会津侯は闇斎に先たちて寛文十二年十二月に歿す、翌年正月闇斎会津に赴き侯の葬式に会し録を辞して帰る、侯に侍してより凡そ八年であつた。

山崎家譜

曾祖父、姓は山崎氏、浄栄と号し播州の人。その生死年月不明、歿した日は十三日。曾祖母は、慶長十四年（一六〇九）八月六日播州三木で歿。子三人を生み、男二人、女一人。皆幼くして父を失う。長男は祖父で、次男は早死、季女は慶長年中摂州大坂で死亡。祖父は浄栄と号し、若きとき又四郎。二十四才から正二位木下肥後守家定茂叔浄英法印に仕う。慶長十一年四月から又左衛門と呼ばる。弘治三年播州完粟郡山崎村に生れ、寛永元年（一六二四）十一月二十二日京都で歿。知恩寺に葬る享年六十八。祖母姓は多治比氏、名は良、妙泉と号し、永録五年（一五六二）九

月九日摂州西生郡中嶋村に生る。寛永十七年（一六四〇）一月九日京都で歿し、知恩寺に葬る。享年七十九。男子三人、長男は父君で、次男の小字は、六蔵、六左衛門と称し季男初め八右衛門、のち半右衛門。父君は、天正十五年（一五八七）五月四日日の出の時泉州岸和田で生れた。

延宝二年（一六七四）十月二十一日京都で歿、二十七日夜黒谷山に合葬。享年八十八才　名は、長吉、小字は鶴千代、十一歳から法印の側に侍つた。十九才で清三郎と呼ばれた。法印薨じて其嗣従五位宮内少輔利房に仕えた。時に年二十三。清兵衛と呼ばれた。宮内位を失うこと三年、これに従つてよく仕えた。宮内位に復してから致仕、自ら三右衛門と称した。時に年三十二。四十四で再び仕え、清右衛門と呼ばれた。四十七で復去つて、三右衛と改称した。その後困窮、五十五で浄因と号した。母君姓は佐久間氏、名は舎奈、天正九年（一五八一）十月近江の州安比路に生

寛文十一年（一六七一）二月二十一日京都で歿。二十七日黒谷山に葬、享年九十一才。子四人を生。男女各二人。長男慶長十七年（一六一二）生れた早死。次女二十年五月九日生、名は鶴、―某氏に嫁し、寛文十年（一六七〇）六月二十二日京都で死亡、二十四日夜黒谷山に葬つた。享年五十六―次女元和三年（一六一七）三月一日生、名は玉某氏に嫁し、寛文四年（一六六四）閏五月十一日京都で死亡。十五日黒谷山に葬享年四十八―

季男は嘉である。四年（一六一八）十二月九日午後十時に生る。小字は長吉、初め母君夢に比叡坂下の両社神に参り、鳥居の前で拝んでいると、老翁梅花一枝を折つて母君に与えた母君戴いて左の袖に納めると、そして身ごもつた四人皆京都　生れである。六右衛門は文録四年（一五九五）六月十日播州姫路で生れ、寛永八年十二月五日京都で死んだ享年三十七。叔母の姓は安田氏、男子一人、太郎兵衛と称した。その子は源太郎。半右衛門は慶長四年（一五九九）一月晦日大阪に生れ、寛永二十年（一六四三）四月十八日京都で死亡。知恩寺に葬―寛文三年二月六日黒谷山に改葬　享年四十五子がなかつた。

父君の云はれるのに、先君性正直で、武志あり、若きより古筆の三祀託宣一幅を持ち大切にして朝夕之を誦した。拝せんとするときは必ずたらいで漱ぎ、道服を着て袴をつけてこれを掛けた。吾等幼き時、これに触るとひどくしかられた。吾もまた先君の言付で、若年から之を誦した。その古筆を嘉に賜つた。祖母は性質厳しく、言葉少なく飲食節あり、かつて嘉姉弟に云われた。諺に身一銭、目は百貫と、汝等目をそこなうな、よく字を習え、字を知らなければ目なきものと同じとその言は本当である。手があつて目がなければ物がとれない足があつて目がなければ、路を行くことが出来ない。書物があつて目がなければ、読むことが出来ない。目があつて字を知らなければ本を読むことが出来ない

書を読むことが出来なければ、ぼんやりして向うところを知らない。目のない者と同じである。目は百貫とはよく言つたものである。字を習えの教えまたよろし。父君窮居貧乏の時、祖父母健在で、嘉姉弟は幼く、老を養い幼を育て其の苦労他人では堪えられないところである。父君性正直で、謙遜、人なみ悦んだ。母君性厳しく非常に吾等を愛したけれども、徒に遊び、飲食をほしいままにすることはやかましかつた。いつも誡めていうに、鷹は饑えても穂を啄まず。男子は志を貴ぶべきだと、寛永六年（一六二九）嘉十二才、父君清兵衛と呼び、正保三年（一六四六）三月五日父君の命で本氏に復し、嘉を名とし、字は敬義、闇斎加右衛門と称した。慶安三年（一六五〇）（先祖の位牌を作り九月二十二日から晦日までかかつて出来た。二十五日父君嘉に語つて、前夜夢に神が吾に云われた。今より後忠平と汝を呼べと。嘉その考感を嘆じた。二十七夜、嘉幽都明都幽明室の字を夢み、伝牌を家礼をもつて祀り、しるして大切に保存父君日参、嘉もまた侍つた。父君平居無事、庭樹の間に従容し、時に嘉に従つて、こどもに小学の書及び嘉の詩文を読ましめ、聞いて楽しんだ。五年の五月初め、父君寿誕の日、子男嘉謹んで識す。承応二年（一六五三）十二月鴨脚氏を迎えた。明暦元年（一六五五）春初めて講席を開き、まず小学、次に近思録、次いで四書、次に周易程伝。二年十二月二十一日講じ終り三年一月倭鑑の筆を起さんとして一月七日藤森に詣でて詩を作る。

親王強識出郡倫　端拝廟前感概頻
渺遠難知神代巻　心誠求去豈無因

二月二十一日京都を出て伊勢に詣で、二十六日参宮、三月一日京に帰る。十三日八幡宮に参り、四年二月二十七日京を出て東武に遊び井上内太守を主とする。

万治改元八月二十一日京に帰る。道に参宮、二年三月二十三日東遊、八月十一日帰る。道に参宮。三年三月九日東遊、八月八日帰る。四年三月二十九日東遊、道に多賀宮に参る。寛文改元（一六六一）八月二十七日帰る。二年三月二十一日東遊、五月二十七日帰る。三年二月六日祖父母を黒谷山に改葬、二十一日東遊、八月二十一日帰る。九月二親参宮、嘉姉弟が従つた。是月十四日京を出て十六日山田着、福嶋氏に宿る。其夜外宮を拝し、明る朝内宮を拝して嘉、詩を作る。

千秋神在祭儀新　時致拝参親子人
正直勅宣吾不弐　一心階下仰天真

新建材
一般建築材
パネル
プラスチック桶
の
御用命は
でんわ
山崎292番
ヤマフクに
山崎町鹿沢
山福製材所
（電話局前）

衛生材料
薬剤調合
飯塚薬局
山崎出張所
山崎町山田
（電 三三四）

十八日山田を経て二十一日帰る。十四日から二十日まで晴二十一日雨、四年三月八日二親八幡宮に参る。嘉姉弟三人随行、明る日帰る。二十四日東遊、四月二十九日姉の病を聞いて五月四日帰る。五年二月三日家を造り上梁。三月二十一日東遊、会津中将源太守を主とする。十月七日帰る。六年三月二十一日東遊、九月二十一日帰る。七年二月二十一日東遊、病んで四月二十二日帰る。病間洪範全書を修して、九月三日成る。九日序を書く。此書を読みだしてから二十余年、たずねて病いゆと。父君の年八十一、ああ八十一亀卜の句あり。北部で祈禱連歌。八年三月二十一日東遊八月五日帰る。道に参宮、九年七月十二日東遊。道に参宮中臣祓を大宮司精良に受ける。閏十月二十五日帰る。十二月二十四日土佐将監光起に、父君の肖像を描かし、嘉賛して、

乾父坤母一視同仁家君寿影於我尤親

十一年八月十八日東遊、冬吉田神道の伝をきく。十一月二十三日冬至、垂加雲社の号を蒙った。吉川惟足がこれを書いて自ら賛して

神垂祈禱冥加正直我願守之終身勿感

二十三日藤森の記を作り十二月八日帰る。十二年八月十七日東遊、会津に至り十一月十一日帰る。十三年一月二十六日東会津に行、源中将の葬に会する。三月二十七日事を成して六月四日帰る。

右先生自書也

天和二年壬戌九月十六日終于平安城二条辺猪熊寓居葬于黒谷山享年六十五祭垂加社

註

垂加文集巻七最後の「山崎家譜」によった。勝手な訳文で申訳ないが、大意は解つて頂けると思う。この家譜は、寛文十三年（延宝元年）で終つている。あと約十年間は欠けているが、闇斎自作であることは資料として重要性がある。年号の下の数字は、便宜干支の代りに現代人に親しみのある西暦年を入れたものですから念のため申添えます。

闇斎著作目録

著書

垂加草全集　三十卷　垂加文集　十四卷
文会筆録　二十卷　大和小学　魯斉考　二卷
遠遊紀行　一卷　再遊紀行　一卷
本朝加元考　一卷　経名考　一卷　四五六経名考　一卷
桜弁

校刻訓点

小学本註　二卷　四書　十四卷　近思録　十四卷
周易本義　十二卷　周易学啓蒙　四卷　著卦考誤　一卷
孝経刊談　一卷

表章書

白廉洞学規集註　一卷　敬斎箴　一卷
感興詩考註　一卷　白本感興詩　一卷　武銘　一卷
仁説　一卷　仁説問答　一卷　性論明備録　一卷
沖漠無朕説　一卷　朱子訓子帖　一卷　拘幽操　一卷
朱子訓蒙詩　一卷　薛文清策目　一卷　清沈文　一卷
朱子奏劄　一卷　山北紀行　一卷

編次書

小学蒙養集　三卷　大学啓発集　六卷　孝経外伝　一卷
洪範全書　六卷　朱易衍義　三卷　周子書　一卷
中和集説　一卷　孟子要略　一卷　周書抄略　三卷
張書抄略　三卷　程書抄略　三卷　二程造道論　二卷
朱子抄略　三卷　闢異　一卷　朱子社倉法　一卷
大家商量集　二卷

神道書

風水草　三卷　風葉集　五卷　神代巻講義　一冊
口授持授編　一冊　舎人親王事並系図　闇斎中臣祓秘訣　一冊　中臣祓大事　一　中臣祓風水鈔　一冊
三科祓事　一通　垂加翁神説　一冊　垂加中訓　一冊
土金伝　一冊　龍雷伝　一冊　元元集美言　一卷
玄義講習　一卷　伊勢二所大神宮御鎮座次第記葦水草　一冊
中臣祓伝　一卷

色彩を生かした
新感覚
シャーベットトーンの
見るも涼しい浴衣
ここの夏の浴衣は
高野真呉服店で
東和通（電一三〇）

山崎闇斎神社の創建

宍粟郡山崎町鹿沢即ち旧士族屋敷の一画に、古から闇斎邸と云い伝えられている土地があつた。その邸内に古井戸あり、古老はこれを闇斎生湯の井戸であると云うこの由緒ある土地に山崎闇斎先生をお祀りしたいという郷土研究会の念願がかなつて、山崎闇斎先生旧蹟保有会が設立され、発足したのが昭和十四年一月十六日であつた。同会の役員は、会長に前野修二、副会長に安井金三郎、尾崎孝三郎の両氏、幹事に春名荒太郎、大前沢市、南部耿介、安井寅一前野愛吉、志水富次、安原源十郎、小針亀也の諸氏が就任同年二月十一日に保存会の趣旨書を印刷して、賛助会員の募集に踏み出したのである。町内は勿論、京阪神方面にも運動して、東奔西走の結果ようやく予定額の募金を得て、闇斎屋敷である鹿沢字通り町一三二の一田八畝七歩及び一三二の四田五畝九歩計四百九坪を購入した。

次いで、昭和十四年十一月十四日神社敷地としての地鎮祭を執行、仮神殿を建設して、翌十五年一月十五日京都垂加社から分霊を受けて奉祀した。翌年八月には表門及び門長屋を新設してようやく神社の形体を整備したわけである

なお、表門は佐用郡より移築したものである。この門長屋の一室は平和堂と呼ばれる。山崎闇斎先生祖考の碑は、碑面有馬良橋氏、碑陰に内田周平氏の拝亳撰文で、昭和十六年十一月建碑されたものである。（安井記）

祖考の碑々陰記

山崎神社の祖考の碑は、門を入つて右側川田順歌碑と並んでいるが、四十二糎と六十一糎高さの二段の台の上に建てられ、基部巾は九十八糎、上部で七十九糎、高さ一米十糎の堂々としたもの。厚さ十六糎の青みがかつた石であるが、碑面には「山崎闇斎先生祖考之碑」と中央に記し、左側に海軍大将有馬良橋敬書とある。裏面にぎつしり碑陰記があるが、最後の紀元二千六百年九月二十四日後学内田周平拝記謹書などよく解るが、文面は一寸立読みに無理がある。この機会にその釈文を掲げて御参考にして頂きたいとつとめて平明に御紹介する次第です。

山崎闇斎先生は、幕府専権の日に京都にあつて、神儒二道を兼ねおさめた。尊王の意最も篤く、国体を明かにし、名分を正して門人を教えた。其学遂に宗源となり、一は伝えて絅斎、浅見氏、再び伝えて強斎、若林氏である。波流益々広く終に四方に広がり、人心を動かした。幕末に至りて国内多難、天下の志士は争つて京都にゆき王事につくし、維新鴻業が遂に成功した。これは先生尊王名分を正

すの声を先ずあげてこの基をひらいたのである。

播磨国宍粟郡山崎村は、実に先生祖父浄泉君のふるさとである。其あとなお存して、闇斎邸という。昭和十五年朝廷が紀元二千六百年の慶典をあげて皇運の隆昌を祝う。ここにおいて、郷人先生の功勲いよいよ高きを尊び敬いて、この一月邸内に一宇を創建し、山崎神社と名ずけ、京都垂加社の分霊を乞うて祀つた。このごろまた、其の傍に石を建て、山崎闇斎先生祖考の碑という明治神宮司有馬海軍大将に乞いて、之に書し、周平に碑陰の記を依頼した。

謹んで案ずるに、浄泉君は、又左衛門と称し、木下肥後守家定に仕う。性正直、旧本三社託宣を得て、朝夕口を漱いで道服を着て文を誦した。寛永元年歿、時に先生七歳、祖母多治比氏は、また性きびしく、先生に語りて云う諺にあり「身一銭、目百貫」汝よく字を学べ、字を知らなければ、盲と同じであると、母佐久間氏また先生に教えて云う「饑えたる鳶は穂を啄ばまず。士は志をたつとぶべし」と嗚呼先生の学問の深き、風節の高き、家庭教育に受くること少くない。流に沿つて、源を尋ね、敬つて其の事を述べる。

青果・食料品

松本屋本店

西町　電二六一番

闇斎先生二百八十年祭

阿部博士の大講演会

四月一日午後一時より下村記念館にて、先生の木像を正面に安置し、山海の供物をささげ、根岸宮司外神職二人によりて、厳粛に修祓及祝詞奏上あり、各種代表者の玉串奉呈ありて式を終了し、同一時四十分より記念講演会に移る。

一、挨拶　評論家　嘉治隆一先生

一、母の郷に近く来て　元伊太利大使　日高信六郎先生

一、山崎闇斎の学問　東大教授文博　阿部吉雄先生

以上極めて有益なる講演あり、聴取者も多く、一同熱心に聞き終り、閉会午後五時。

建碑二基の除幕式

―闇斎先生ゆかりの地にて―

吉川英治先生奉献の辞記念碑、及び川田順先生の歌碑の除幕式が、四月一日午前十時より闇斎神社で挙行せられた東京より嘉治隆一氏の外神戸龍野より来賓の参列があり、村上町長、町会職員、町総代、新潮会、郷土会、奉賛会員其の他百余名参列。

一、開会の辞　根岸宮司外
二、修祓祝詞奏上　前野四郎氏
三、建碑の経過報告　嘉治隆一氏、村上町長、大久保町会議長
四、来賓の祝辞
五、閉会の辞

右終了後直ちに前野四郎氏により奉献碑、安井寅一氏により歌碑の除幕がなされ、空中に吊した大薬玉が割れて数十羽の鳩が飛びたつて、一同拍手、つつがなく除幕式を終つた。

山崎闇斎奉賛会新発足

四月一日山崎町鹿沢公民館で、山崎闇斎奉賛会総会を開催、闇斎二百八十年祭と碑石の除幕式を終つたので新役員を改選。会則を定め、山崎町民全員の支持援助を要望、山崎闇斎神社の観光価値も一段と認識されることであろう。総代会、新潮会、郷土会、教委会などの代表者を左のとおり決定。

会長前野四郎、副会長安井寅一、壺阪寿、常務理事横井恕一、理事浅田卯作、南場春治、千本庄一、保川恒治、橋岡春治、宇田松右衛門、西岡永栄、和田秀男、松井与市、鍾田真一郎の諸氏

なお、顧問として、村上山崎町長、大久保町議会議長、志水町助役、岸野町教育長の諸氏就仕された。

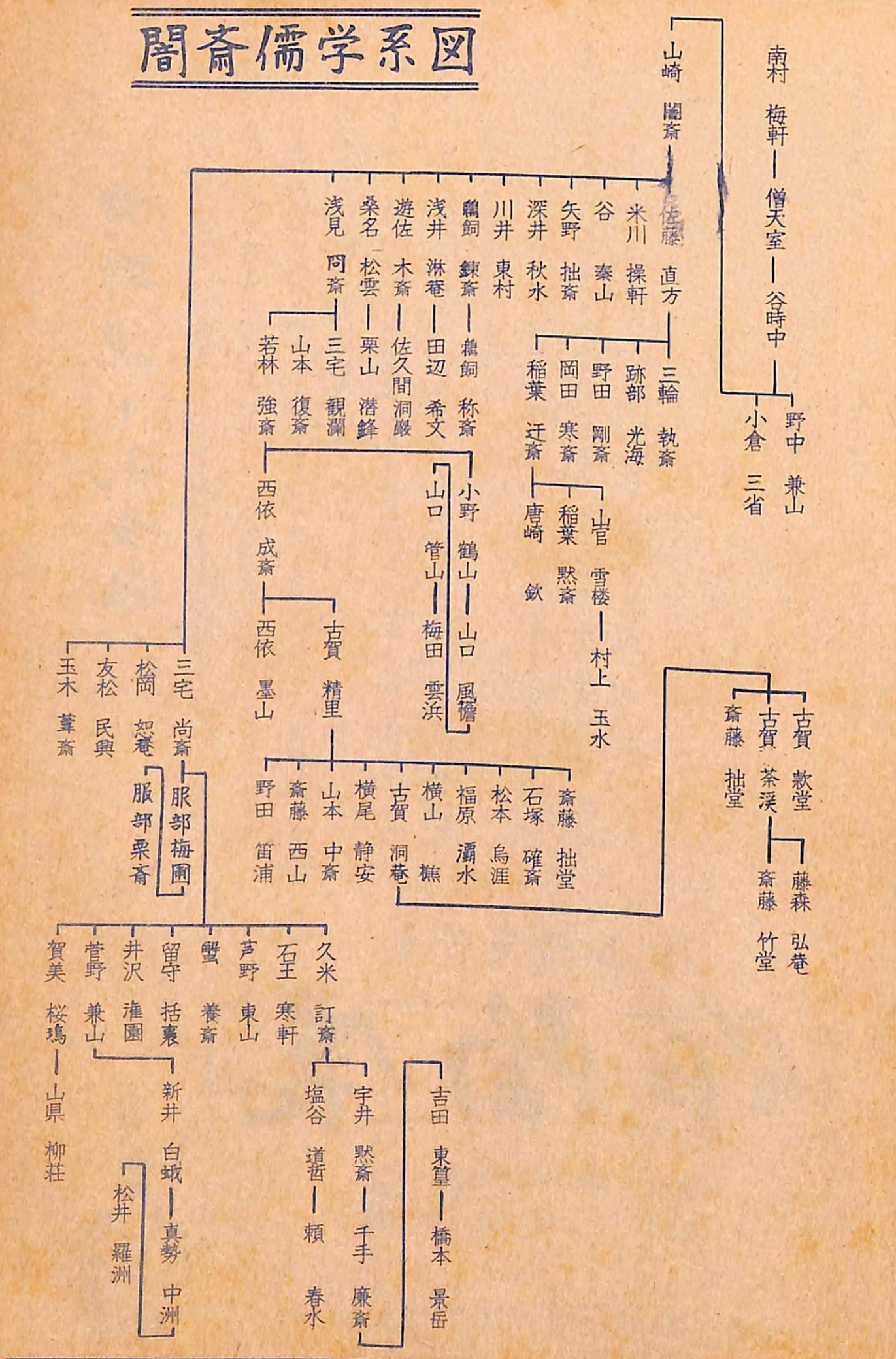
……あとがき……

阿部教授の講演筆記は、肥塚氏の大変な骨折りで収載。三、四回続く予定。現代の闇斎評価の資料として価値あるものと信じます。誌面を増頁しても、闇斎の半面も紹介できません。

神道関係や研究参考書目録など省略していますが、次の機会にゆずります。

本会かねての念願である郷土館（考古館）建設は近く具体案発表、御協力下さい。

闇斎儒学系図


山崎 闇斎
佐藤 直方
米川 操軒
谷 秦山
矢野 拙斎
深井 秋水
川井 東村
三輪 執斎
跡部 光海
野田 剛斎
岡田 寒斎
稲葉 迂斎
山崎 雪楼
稲葉 黙斎
唐崎 欽
村上 玉水
鵜飼 錬斎
鵜飼 称斎
浅井 淋菴
田辺 希文
遊佐 木斎
佐久間 洞巖
桑名 松雲
栗山 潜鋒
浅見 冏斎
三宅 観瀾
山本 復斎
若林 強斎
小野 鶴山
山口 風軒
山口 管山
梅田 雲浜
西依 成斎
古賀 精里
西依 墨山
三宅 尚斎
松岡 恕菴
友松 民興
玉木 葦斎
服部 梅園
服部 栗斎
斎藤 拙堂
石塚 確斎
松本 烏涯
福原 瀾水
横山 樵
古賀 洞菴
横尾 静安
山本 中斎
斎藤 西山
野田 笛浦
南村 梅軒
僧天室
谷時中
野中 兼山
小倉 三省
古賀 款堂
古賀 茶渓
斎藤 拙堂
藤森 弘菴
斎藤 竹堂
久米 訂斎
石王 寒軒
芦野 東山
蟹 養斎
留守 括嚢
井沢 淮園
菅野 兼山
賀美 桜塢
新井 白蛾
真勢 中洲
松井 羅洲
山県 柳荘
宇井 黙斎
千手 廉斎
塩谷 道哲
頼 春水
吉田 東篁
橋本 景岳

竜野焼と孔雀釉

竜野焼は、戦後中国より、引揚げられたる松山雅英先生が、創始された窯にて、地方に於ては、竜野焼として親しまれ、又中央に於ては、先生が苦心して大成された、孔雀釉に依つて、日本の陶芸界に新風を吹き込まれたと云われる、独自の釉薬にて、常に現代日本の第一線作家として活躍して居られます。

此の孔雀釉は、後世に於て、昭和時代を、代表する釉だと云われ、近年、特に専門研究家の間で、問題に成つている有名な先生の代表的な釉でありまして、勿論、日本にも、世界にも、比類のないものであります。

かつて昔、姫路には、東山、赤穂には黄谷と、名窯がありましたが、今は無く、現在兵庫県には出石と、丹波に窯がありますが、前者は、日用食器を主に、後者は雑器を主に焼いていますので、美術工芸品として兵庫県を代表する貴重な竜野窯であり、西播唯一の窯であります。

今回特に松山先生の御承諾を得まして、孔雀釉と竜野焼を一堂に展覧し、山崎地方の皆様に御観覧願いたいと、発起人一同にて、別記の如く、展覧会を開催する事と成りましたので、此の好機に、我が日本を代表する、美術作品を是非御観賞下さい。

昭和三十七年五月一日　　松山雅英先生作陶展　世話人会一同

松山雅英先生

作陶展

日時　昭和37年5月12日(土)・13日(日)

場所　下村記念館

主催　松山雅英作陶展世話人会